街道とまちづくり

第55回 飛騨街道

武将によって開かれた飛騨街道

下呂市長（岐阜県） 山内 登

飛騨の山深いところにも、いつ頃から道（街道）が開けたのか。飛鳥・奈良・平安時代、この地域にも700年代に東山道飛騨支路（後の飛騨街道）ができ、現在の萩原町上呂地内に伴有駅が、下呂町地内には下留駅が置かれ、官道の要所として都と結ばれていた。

飛騨川と下呂温泉街

飛騨の武将「金森長近」と飛騨街道

天正13（1585）年、羽柴（豊臣）秀吉の命で飛騨を平定した金森長近は、高山城主となると街道整備に意を用い、中でも「飛騨街道」の改修には多大の努力を重ねて、「小坂通り」「中山七里」を開通させた。現在の高山線や国道の道筋が形成されたのも、この開拓によるものである。

金森氏は、この萩原地域、南飛騨一帯を統括するに好適な拠点と見立て、かつて下呂の地域を治めていた三木氏を攻める際に萩原に「諏訪城」を構え、それ以降各地から貢進の道が開かれた。その後、次第に人の往来や物品の取引も始まり、この地域は各地をつなぐ交流点として「飛騨街道」の要となり、南飛騨における交通の要衝となってきたのである。現代を見渡すと、商業観光地であった街道の宿場町は昔からの宿屋、商店のつながりを物語っている。

益田川の両岸には並行して走る東西の街道が開けており、その東街道は飛騨街道の本通りとして、重要な役割を担っていた。また、川西街道はそれを補充する要路として、多くの渡し場や橋によって交互に結び付きながら、北は山之口街道、また山を隔てた馬瀬とは幾つかの峠道によって交流を深めていった。

飛騨から都へ、都から飛騨へと匠の技を伝えた「飛騨の匠」は誇り

この道を、毎年、都へと行き来した「飛騨の匠（工）」が知られており、耕地が少なく納税に充てる産物に乏しい飛騨では、税の代わりに木工技術者を都に送り出していた。彼らは都にあって宮殿や社寺の建造に当たり優れた技術を発揮、都の内外に評判が高まり、「飛騨の匠」とたたえられたとされる。

温泉寺の紅葉ライトアップ

橋が街をつなぎ 交通と商業の発達・発展へ

時代が変わり、明治の末から大正にかけて、益田郡内には小坂の「朝六橋」と下呂の「帯雲橋」、それに萩原の「浅水橋」と、三つの橋が架けられた。明治15年から、行商を始める人、信州まで木曽馬を買いに行く馬方、さらに大八車を高山に買い入れる人もいるなど、時代に応じ先々を見通して商売が盛んになった。

やがて飛騨街道は、曲がりくねった昔道から往還道と呼ばれる、幅約2・7mの県道になり、明治20年には2級県道になっている。馬車を引き荷物を運ぶ時代から、昭和に入ると馬車に代わってトラックが飛騨街道を走るようになった。

もともと、農家が集まっていたこの平地に物品を取り扱う商人たちも住み着くようになり、家が増えれば物の取引も盛んとなり、商いをなりわいとする家も多くなってきた。明治の初期には、萩原地域を将来性のある地点と目をつける人が増え、商業が盛んになっていった。

飛騨街道で「天領朝市」が行われている様子

さらに、地域の商店街が発展するにつれ、商取引の多い町村に、宿屋が次々と移ってきた。この「飛騨街道」で、街道一番の宿場町も旧萩原宿にあり、商人衆や旅回りの役者、富山の薬屋などが宿屋の常連のお客であった。まちなかには「お諏訪の舞台」と呼ばれた芝居小屋「明治座」もあり、村芝居やさまざまな旅興行が催された。また、「栄湯」という銭湯もあり、暖簾のとおり大変繁盛し、人々の社交の場にもなっていた。

現在、飛騨街道は、多くの観光客が行き交う道となっている。その存在が下呂市の発展を支えていると言っても過言ではない。

下呂に暮らす私たちは、先人から引き継いだ財産を後世に残していく必要がある。そのためには歴史をひもとき、文化に親しみ、自然を大切にしながら、持続可能な地域づくりにいそしむことが肝要と考える。

一口メモ 飛騨街道

多くの湯治客を名湯に誘った飛騨の街道

飛騨街道は、五街道の一つ中山道と越中、日本海とを結んでおり、ほぼ現在の国道41号に沿っている。

美濃加茂の太田宿で中山道と分かれ、木曽川水系最大の支流飛騨川沿いに北上。太田から高山までは一部を除き、古代官道「東山道飛騨支路」に沿っている。

かつて湯ヶ峰の頂上付近で、現在は飛騨川の河原に湧く下呂温泉は、10世紀半ばから知られており、江戸時代の儒学者林羅山によって西の有馬、東の草津と並ぶ「天下の三名泉」とたたえられた。文政年間（1818～1830）には、年間3万人以上の湯治客が訪れたとされる。

企画協力：全国街道交流会議「街道交流首長会」